

高校生の結生は、ボーイフレンドの勇人に突然振られた。納得がいなくて、勇人と新しい彼女を呼び出した神社で、結生は子どもの頃「行方不明」になろうとしたことを思い出す。

主な登場人物

●結生

幼い頃、母親の晶が突然行方不明になる。現在は、父とその後妻・美園との3人暮らし。

●美国

16年暮らした夫と死別し、47歳で婚活サイトで知り合った結生の父・伸伍と再婚。

●伸伍

佐世保の老舗和菓子店の店主。

連載小説 9

しずかなパレード

井上荒野

この頃あまり喋らなくなった勇人から、めずらしく電話があった。いつものように学校から一緒に帰って、アーケード街の入り口で別れてから十分と経っていなかった。神社で待ってるから出てこれないか、と言う。結生は行くと答えた。制服からセーターとデニムに着替えダウンを羽織って、スマイルを連れて家を出た。

赤いダウンジャケットは、買ってもらったばかりだった。新春セールだったとはいえちょっと高くて、父親はしぶったがママさんが買ってくれた。ママさんというのは父親が再婚した相手のことで、中学を卒業する頃までは「美園さん」と名前で呼んでいたが、去年、十六歳になった日にふと思いついて熟考し「ママさん」と呼ぶことに決めた。父親も後妻さんもどう受け取ればいいのか迷っているふうだったが、結局「美園さん」よりは「ママさん」がまだという結論に至ったようだった。

やつと勇人にダウンを見せられる、と結生は思った。三学期がはじまってから学校への行き帰りはそれまで通り一緒だったが、私服で会う機会がばったり減っていたのだ。サッカーもつとがんばることにした、というのが、本人からの説明だった。部活以外でも自主トレをやっているので、疲れているしサッカーのことで頭がいっぱいなので、結生と会話する余力が削られているらしい。

神社というのは駅へ行く途中の左の丘の石段を登ったところにある小さなお社だった。結生と勇人の自宅のちょうど中間地点で、いつもほとんど人気がない場所だったから、以前は始終そこでふ

たりで過ごしていた。石段の途中から勇人がこちらを向いて立っているのが見えたから、結生は大げさに手を振った。何かもつとふざけた真似で応えてくれると期待していたのに、勇人はくると背を向けてしまった。

社の横手の斜面に、誰かが不用品を置いていったみたいなおベンチがあって、結生が上がると勇人はそこに座っていた。スマイルが尻尾を振りながら先に近づいていく。勇人は犬の頭を撫でようとしなかった。

「なんで無視するの」

結生は言った。

「スマイルがかわいそうじゃなかね」

勇人は困った顔で結生を見た。

「ちよつと、座ってくれんね」

「はいはい。かしこまりましてございます。隣に失礼いたします」

勇人は笑わなかった。結局、その日は一度も笑わなかった。「ごめん」としきりに言った。まるで天ぷらの衣みたいだと結生は思った。「もう付き合えない」というのがその中身だ。

「なんで」

と結生は聞いた。

「ごめん」

「ごめんはもういいから。理由が知りたかだよ、うちは」